女今川
此六歌仙

相生百人一首姫鏡

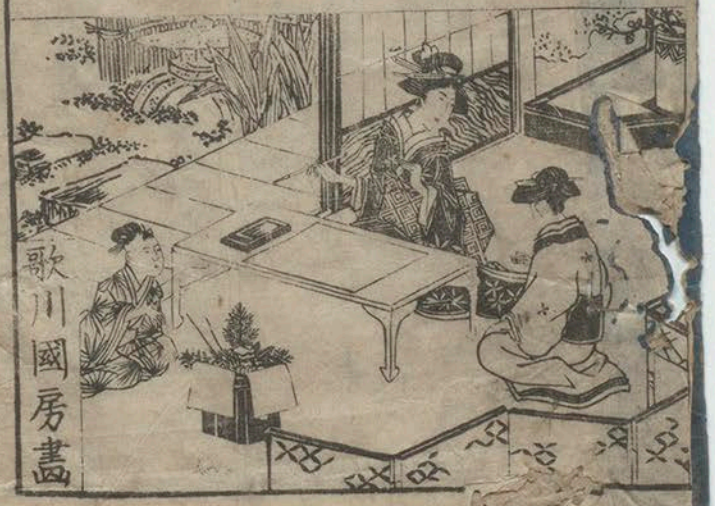
詠歌 假名遣改正

兒女養育之要本

吉書始めの詩歌

瓦筆和合樂
地福皆吉祥

池塘東北風波解
窓梅小面雪初寒



歌川國房畫

女用文心はこの文

女のみちはひとつにあらず
そのこころのうつくしさゆる
やうは出べし又云も
やとこころふてとうぬれて
徳むべしうるはしき意の
文こころこびをうる
こころに幸なるまねとも

天智天皇

秋の田の
かりほの庵の
とまをあらみ
わがころもでは
つゆにぬれつつ

持統天皇

春すぎて
なつきにけらし
白たへの
ころもほすてふ
あまのかぐやま

柿本人麿
あしびきの
やまどりのをの
ながながしよる
ひとりかも
山部赤人
たごのうらに
うちいでて
みれば
白たへの
ふじのたかねに
ゆきはふりける
猿丸大夫
おくやまに
もみぢふみ
なくしかの
こえきく
ときぞ秋は
かなしき
中納言家持
かすがの
をぐらの
やまに
なくしかの
こゑきくとき
ぞあきは
かなしき

の墨つぎとよく〳〵ひ
ゞでゝそ人の名と玄
とさい墨と絵てゝ玄ゝ
ひの元祝元服元法師
四平復四収寺こしらの
絵ら墨と絵て彫ふな
ゝ玄ゝ〳〵又元玄元病
れら絵おとのぶちゝごご
と玄河ハ墨とつゞと上
ゝ玄下と〳〵す墨て
玄ゝさくこんまんのみな
ゝ玄ゝ玄ハ大ふ墨ゝん
ひかゝ〳〵ゝかゝめく
ワゝゝ〳〵戻ゝみゝくこんら
の絵玄ゝゝ〳〵

安信伴蟇

あまのくゝゝり
さけ
ゝゝとを
うすがなる
みゝさのめふ
出月ゝを

法擬法師

ワゞいかハ和の
ゝゝゝ
ちゝを
すむ
ゝとをうゞふゝ
人ハいふなゝを

女ものさま

女のまゝごたゝく
多さ中よ井一布の
撰紡績惣汁の
乃と卒生の勤と
すゞゝ付ゝよゝ
るハよ脊とゝん
ゝゝ紙にとゝゝら

小野小町

花のいろハ
うつりよ
いたづらに
ワゞ身よふる
なゞめせまふ

蟬丸

ちゝしやこのゆく
ゝるを
ゝゝれて
ちるも
あふさゝろ
せた

まゝや今長羽ぐと
あくゝす
一呉服尺一尺八寸て
そで尺計すく
一ゝら一尺八寸て
そで尺計す五ゝく
一呉服一尺八ケらて
九寸六分く
○一ッ分のつりりハ
長計尺袖下一尺二寸
五分社一尺八寸五分社
くぐ上すて一寸五分下ハ
三寸衿三尺六寸衿
くぐ二寸三分衿くと
八分のつりりく

○ちりちんかゆがこて俗
こたあここよひてん
ありちりちんのこ
よういことすーゆき
ここーこのこころま
すくよさーあこ今こ
ゆすーの毛ことぬう
時かしーもゆむこと
なーこ地ものこな
今こ俗かは俗門よ
こかはるあくこ花の
あかよ拭とぬこー
こたり俗ここあよ
かーこたりとゆこ
ゆせて俗こーまこ

光孝天皇

こここがこころ
なるのこか
出てこるつむ
わこころもてか
ゆきかりこ

中納言行平

たちこうれ
いなばのみの
こねこ わかる
まつここさこば
いまこうこん

地よここすこ
ゆこれて糸ものここ
ごこたりのかこのいる糸
あここかこここここ
りこゆこげこれは
たここねこあこて俗ご
かここここもこのも
の紙とこくゆこ和
げここ強ますこー
又下糸のあこここた
りのこ武かゆひこほり
なごこするよゆん九
ここもこここんこり
ここも紙こここの形
ここここここごこと

素性法師

ちはやふる
かみよも
ここごこ
なこ川
かこれ
なねか
こは

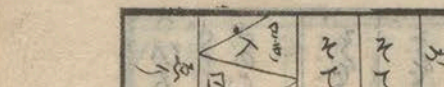
菅家敏行朝臣

ふきの江乃
きこに
よるなこ
よるこく
ゆめ乃こ
ひこ
人ちこくらん

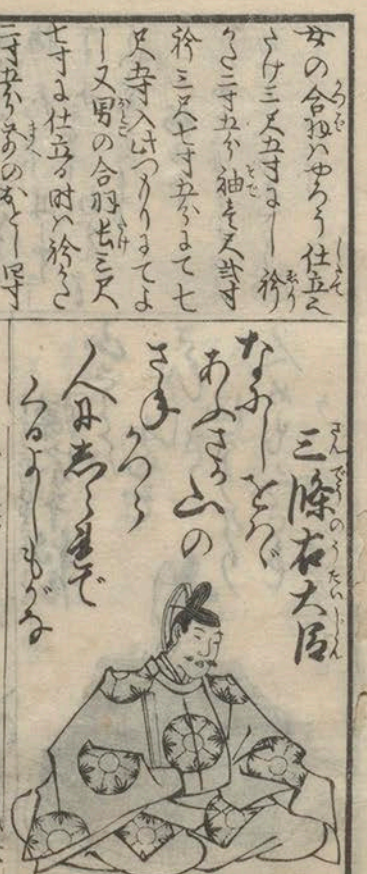
伊勢
なるはがさ
そこのうき
あしのあれ
あいで
このよと
をごてしや
元良親王
うびぬきば
いまこそ
をみじ
なるはな
身と
つらしも
あんとぞ
ゆふ

素性法師
今こんと
いひしまに
なが月の
ありあけの
月をまちいでつる
文屋康秀
ふくからに
あきの草木の
しをるれば
むべ山かぜを
あらしといふらん

○羽織のうち裏たの
間のごとし又合羽の
さらやもはぎこしく
あつと脱入のすたち
び首斗りなり
二尺五寸の羽織
仕立る時八丈にて
丈八尺三寸袖は
て五尺寸八分袷よ
五尺分入け門さ袷
くさ三寸ッ脇る
但一寸五分にて
三寸よりて但し
よしあの下りハ
一寸五分一枝入合丈
三寸二ッ刻の一寸八



女の合羽ハゆろう仕立
さけ三尺五寸袖一袷
くさ三寸五分袖を丈五寸
袷三尺七寸五分よて七
尺寸入けつりてよ
一又男の合羽七三尺
七寸よ仕立る時八袷く
二寸五分あのかた一尺寸
袷三尺三寸よ一て六尺
六寸入こ袷くぐ上すて
三寸山石よさ〳〵へ
くさ〳〵と分る袖を丈
尺寸枝入二尺三寸五分
袖付ともすそくぐ三
寸五分あり



句袋のかう

○野風
ちんこう　一分　白ぎん　三分
丁子　一分　ぎやうの上　二匁
ちやうし　二匁

○すゝ竹
ぎやうの上　三匁　ちやうし　二匁
梅花　五匁　耳しゐ　三匁
丁子　七分五厘　白ぎん　二分
ういきやう　二分五匁

○梅の下
かんやう　二分　丁子　四分
白ぎん　四分　ちやうし　三匁
ぎやうの上　五匁

中納言重盛

みちのくの
なぐろの
ぶつ川
いろゝさとゝて
こひしうるゝん

源家平家合

山ざくら
あるぞ
さびし
ほさりそり
人めもくさも
うしねとゝえぞ

女中大和詞

一ことでとごやくとそ
一りことおおう
一ふる紙とおさー
一べにとおいろ
一こめとうらまき
一ろうとおひや
一ええとおひー
一ざんごといしー
一ぐうふとちうべ
一きーどとおうべの
一奉ものとおひさー
一ふのゆきとわさびか
一がーうりとかんさ
一ものとちやのさと

坂上是則

朝ぼらけ
有あけの
月と見るまで
よしの山
あれる雪の
あさぼらけ

素道別荘

山川に
風のかけたる
しがらみは
なかれもあへぬ
紅葉なりけり

一ひうーとおこそ
一でんぐくとおでん
一たんとうーの
一きん年とこぶし
一ぜいとらひを
一ろうはとうく
一たことたり
一うとばおまの
一ちやムーとおやりど
一くのねとうく
一いとーとおひー
一ろのことぞく
一るぐうねとうろとりよ
一こゆうとばよ
一ひきりとかりのと

紀友則

久かたの
のどけき
春の日に
しづこころなく
花のちるらん

菅原真風

たれをとも
ちるんぜん
たかさごの
松もひとりの
ともなりにけり

すいさーと つゆのふけ
すーと 月よ
やさふさと やさふさ
ないと おひ〜
そうそんと そろ
にきうしと むまひ
こんやくと おや〜
たやくーと おえくれ
ーらと ちさて
せにと なあ〜
めらっと うらん
くそそっと かけれ
ふうっと ゆう〜
つくくっと つく
うこさと うめめ

紀貫之

人はいざ心も知らずふるさとは
花ぞ昔の香に匂ひける

清原深養父

夏の夜はまだよひながら明けぬるを
雲のいづくに月やどるらん

のうと のり
年と より〜
春と なつのくる
ひや ふと さう
うんと うんう
いうと せきり
さけと くえも
わるほと あまくん
こまめと ことのり
なまつと あと
白とし 秋とし
秋とし うひし
ひーと わるひー
ぬうと さくん
ちんと ちーいと

文屋朝康

白つゆも
夏の夜は
あけのこと
まだ宵なれど
空もてり
月やどりける

右近

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるか

一ぬくもりと　さくらん
一ちんぴけと　あさく
一ますのうち　赤まる
一うまいと　いーい
一後るひと　おちつく
一かきると　おひろう
一うとの〜ふると
一おらーーものすと
一さみの　ちんこと
一あらの　花とふ
一大ぶべんは　ゆくと
一うーさるゆく
一四月さると　ゆり
一ゑどもと　おこさら

源義経

あさぐらふれ
とのく
ちのろ〜
しのぶと
ゆまりて
かぐら
ひしの　ゑ〜さ

平泉澄

ちのぶれど
いろ〜
いでおりう
まぐらひい
ものやりと
人のとふまで

十二月和歌

正月

柳

おかのいと
長ながる
風のを
れや
日は暮て
うぐひす
ち柳の
いと

壬生忠見

ゑをそふ
まぐさ
ちよろ
人ぢれ
ぐと
ぢしをり

清原元輔

ちきり
くるる
をでと
ちぎり
すへの
まつ山
ことぐ
とん

二月

桜

中納言敦忠

あひそめの
のちよりも
ちるぞはかなき
ぬれば
ひとしへりのと
なりにけるかな

中納言朝忠

あふことの
なくてしも
ちくうち
人をも身をも
うらみつるかな

三月

行平の
なごりをしの
ふの浦
なびきた
海の
そのゆうな

藤徳公

あかなくに
ちる人は
おりかへて
身のいとづくる
ちりなるさくら

右衛門督好忠

ゆくのとは
ふる人
うらぶれて
ひえもちぬ
こひのちらぬる

四月　卯花

白妙の
衣ほすと
見るまで
卯の花

恵茂法師

いそしむ
ぎょうけきる
中どの
さびしさに
人こそ
来ねれ　松ハ
ふりける

源重之

風ふく
いそのかみ
なる
たのきの
ぐけそりめと
おりふしころる

五月　水鶏

枝ハ戸と
ささく水鶏の
明かのよ
人やあやうの
新のうつろ

大中臣能宣朝臣

みなとりの
えづのくず
火のうへ
ひるなきつ
りのとこそおり

菅原孝標

ささがさの
とりかざり
いのちさく
なぐくもると
おりしくるる

六月　岩夏

大ぶのひらけるいとよ
三月の
京さくらしき
ときわ門の花

蓮京実方朋信
かくとぶ
えもいふ
さの
さしもぐさ
さしもとる
りゆるらしと

蓮京乃係平信
あけぬまど
ふるりのと
ちりなば
ゆゆしうし
あさぢ〜けるる

七月　女郎花

秋ふ〜て
くれも
ひとる
ちきりや
ちきり
かし合の

右大将乃係母
なげきつ
ひとりぬる
よの
あくるまを
いかに
ものとかいふる

儀同三司母
ワとまし
の
ゆ〜すえ
まで
うくれば
ゆふとうざり
のいのちとりづる

八月 萩

秋をけぬ
いろいろと
みくまの
うつろふ
ものはこのこと

大納言公任

たのかこと
ひさしく
ありぬるを
忘れて
わたさんを

和泉式部

あるごとん
このよの
なりひぐふ
今一さびの
あふこもがる

九月 きくの花

花すゝき
草の秋の
ものさびし
秋のつれなさ

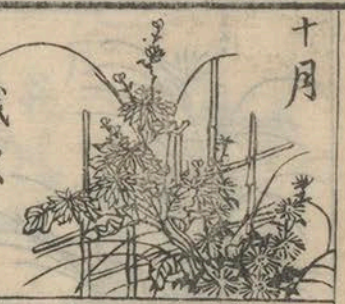
紫式部

免ぐりあひて
見つやも
それとも
見ぬまふくも
うれしみ
よゝの月い

大弐三位

ありあけ山
いるの
さらに
風ふけば
いでそよ人を
忘れやはする

十月



残菊

うゑし月菊の
さかりの白い
花は
行くさ
秋の
ゆくよ

赤染衛門

やまさとの
秋の
まがきの
さよみけて
うぐひす
まそのの
月と
うる

小式部内侍

大江ふいく
のさかりの
ちかけ
ゆきぶ
まさめもこぶ
あぬのそ
ぶて

十月

千鳥

かゐの
川せゝ
ぬなの
月
ひとつ
ゆく
山あひの
油

伊勢の御

いみ
へのなか
のやこと
ゆ
ざと
ふこと
のあり
ひえり
ぬるる

清少納言

よ
ふけこゝて
とりの
そらねい
そらとも
世よあふさらの
せさいゆるさじ

十二月　水鳥

氷ゐる池の氷よ
ふる雪の
うさぎうし
ば
れしの
もらうも

婚礼畧式

結納とりのハ俗ゑ紙
とりのハ上中下の品あり
上ハ紅小袖ニ板の
りの一ツ俗名一夜織
一ツ長箱一幸ひ一白ゐ
一ツ以上三ツと樽肴ハ
七ツ七種ゑ又ハ中ハ
ハ紅の小袖ニ板の拍ニ
俗名一幸ひ一ツ以上
二ツと立ツの立種ゑ又
下ハ白小袖一ツ紅小袖
と一ツと三ツの三種ゑし
太照右ゝ迄ゐれとも
ゐ法よ嘉ゝてさ

引きまきの礼のなり様
又聟の方へ引きまき
姑への祝儀あれども
姑へも聟の方へは婿
の祝儀あり嫁より聟
への祝儀はなくてもよし
○聟の方より婿礼のよ
きを小袖と云ひ小袖と
いふ一色をもとゝ行く
とは合せ糸にてとらる
けり
○婿礼の小袖と云よ
つゝやうのこと
かして袖ばくさん
○色直しの小袖は赤

の深小袖をなをし
もの門祝ひをひら
さとをいひしとの
又ものおもはまし
いひしの多きゆゑ
物なをし
○婿育のとゝをとゝ
一名の二種と二名の三種さ
るべし　婿の本式は二本
入の白木にてつくりひび
縄にて結びるくば巻
るひゝ婿と御さるを
いふのひゝ婿にはは
分て横本のるさと角
婿といふ又名にてしる

とさ一ぢといふく
○折ハ一合二合と出し
蓋ますくるを為ハ一と
すれ一蓋を出へまさ
鯉鮒鯛ゑゝハ一ッ二ッ
と出へ一鯉ハ一尺二尺と
出へ一ゑハ二ッゑゝハ
一ぢひと出へ又味噌
つけ子漬敷みどハ
桶さへ一鯉ぶ一手
鯛千鯖の新ハ第之
塩ゑゝ初鰹漬の
新ハ幸さへ一又さと
漬ハ曲ゑへ麻新ハ重
ゑゝ有ハ祈さへ一

前右衛門督
たゝさ
ゆゝの
ゝ
さゝ
ゝ
ゝ

○婚礼の夜はいろうて
くるのこーと聟の方
の親の長くる人口ち
を迎いに出嫁よつさ
ま乗る出と乗る国も
方揃ひして聟の方
より役人こーと更元すぐ
にくさ入ん
○聟ハ上元より廣る嫁
ハ下元より廣る流より元
宮ゑうて後ゑ乳し
さ女中引渡ーとわ
出て昆布から栗と嫁
より祝いさきむこ
三方より盃とのせ

出ると銚子と提の役
の女中出るもてなしよい女
とてーとつけ揃よい女
てーと生るく提ハ今くへ
のゆくくねんけ敬の女
中三ツ盃のこ方とた
のゆよわて聟の方
ま盃を付聟上元盃
すて二度欣付かへの役
ちよと銚よよかつる
きに似する又むこ一度
欣てけこ献へ又嫁の
面お行嫁二度目の
盃すて二度のむ付又
かへてこ献のむるあの

待賢門院堀川
なにもらんもろこしぞ
ろくろくの
月ぞのこれて
けさよりのとこそおもひえ

法橋大寺大僧都
やくしぎす
なきつるこえ
なぐ
むまど
ぐありあけの
月ぞのこれる
乃因法師
おもひそび
さそも
いのらい
ありのと
うらうらぬい
なこざなるとろ

五行和歌 定家

木

国民の
みな
かみ山の
松そ
ふる

俊恵法師

よもすがら
ものおもひ
あけやすく
ひさしかりける
夏の夜

西行法師

なげくとて
月やはものを
おもはする
かこちがほなる
わがなみだかな

世の中よ
なにをか
なりひ
いる
山ろく
よも
ふかく
なる

藤原清輔朝臣

なげくとて
ものを
思へば
ながき
世の
いかにひさしき

火
海さ秋の
ろくよ
さねくろ
松の
ゝの
ひくことで
ねくろ
ちぎり
ぐろ
蘭丸法師
むくさめの
ほのも
まどひぬ
ゆさの
そふさを
秋の
くらのゆる
夕くれ
望月流る為
なふはねの
ありのうち
ひと秋
ゆえ
月とつくてや
ゑくくろぐき

土
ろれ
はし
くもも
ちくれ
あくくも
ろ
ちよう
なるる
よりの
くみ
山
武蔵門紀左
あのをよ
くなぐ
なくね
なぐくべ
ちのぶくの
くろう
りぐる
殺生門院左衛
ゑをばやな
わぐまの
あぬろ
をぐくふも
ぬまふぐ
かくく
ぬれしいろを

金
源兼相朝臣大臣
二條院讃岐

水
源俊頼朝臣
祭儀雅經

さつま物語り

○魚よりて水を入るべき物に油をくるべし清石とかうしてうりけるを若て火のしまそひとをくし清石と仕へてた

前大僧正義空

おかけたる
うきよの
ちまた
かりのやどる
まつかぜ
すゝぎのそで

入道前太政大臣

こゝろさへ
あるにの
みはの
ゆさ
なりて
ふりゆくものは
わが身なりけり

のごゝろまんべんなくへ
○雨りのうつるときてのゝ所
ふのりとゝきてのゝ所
あらくゝ
○たゞこの中にの外ゝるま
わたゞこのちんゝくとも
ゝつけたゞこ
○もふのつさゝるまハ
まろゝのくいとあく
まくれて仕ふて
○酒のもゝ分ゝるまハ
ろくゝんと水をたて
仕るべし
○うるしの分るにハ
ゝをけとせんし仕べし

権中納言定家

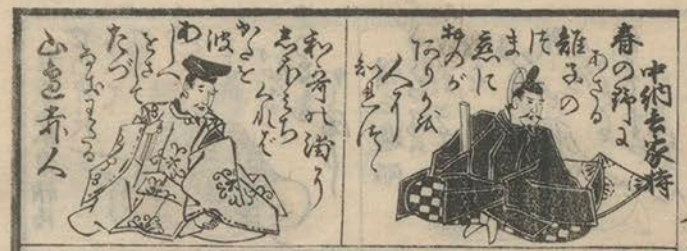
こゝぬ人とまつ
ゝの
ゆふだ
ゆ
ゆ
ゆ

○頭髮の分るハ破と
あるゝら性なゝ
○天ゝ地ゝ人ゝ命ゝの
分るに拔破そ性
なゝ
○ゝゝ血の分るにハ
あつさのことりゝ分て
性ふゝ又仮つふとりゝ
分てあらふもゝ
○ゝゝあゝの分るる
ゝハ陽元儀にゝく
とゝるゝもハ山りゝ
まあゝろゝて長ゝく
○あゝのつゝさるまハ
いゝぐゝいそゝるゝ

三十六歌仙

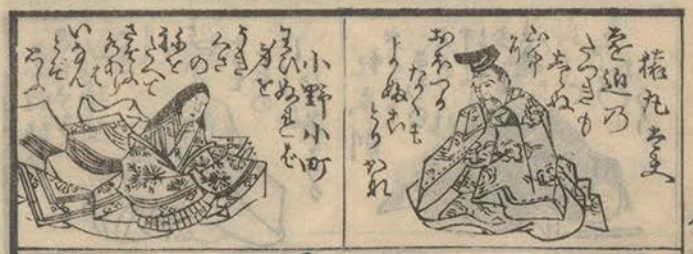
ゝゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

一ぶんぶんぶん

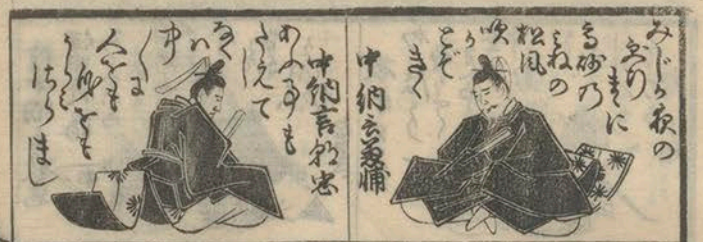


一夫をこの海しわ
わをとゝ魚てを
てゝ海底にゝる
ゝに背きてを
果ゆゝゝのを
うゝを雑ゝゝ

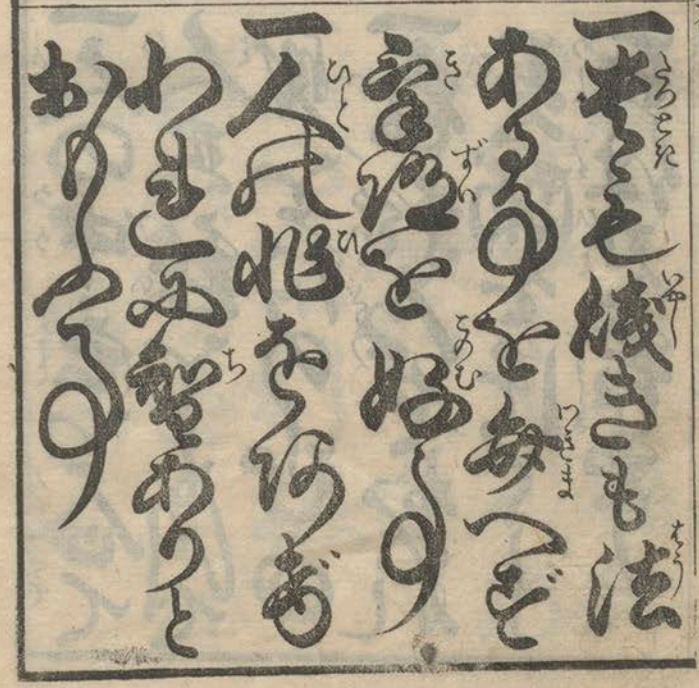
三重ゝ海しておを
海てゝる人をかゝ
しむる事
一枝ひに出しを
庭ゝを集ゝるゝの
足ゝをすきぬゝ

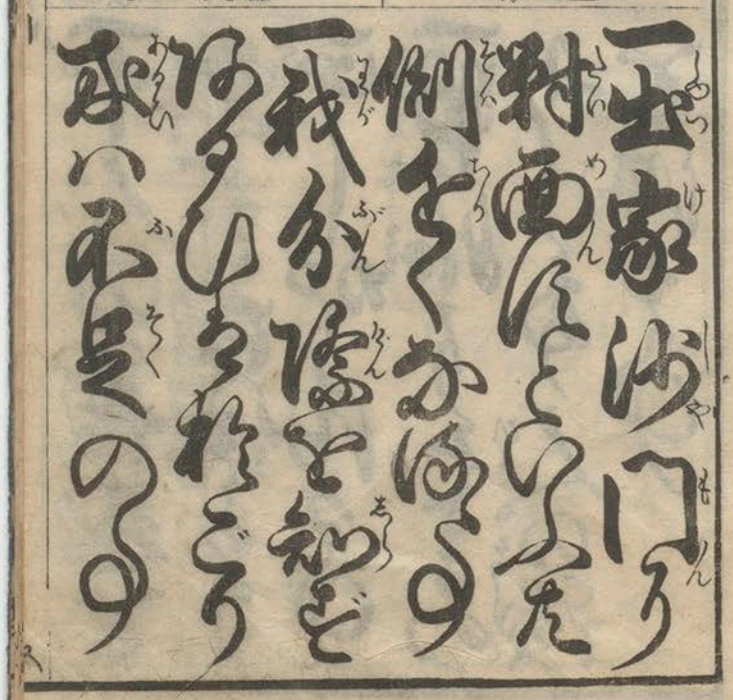


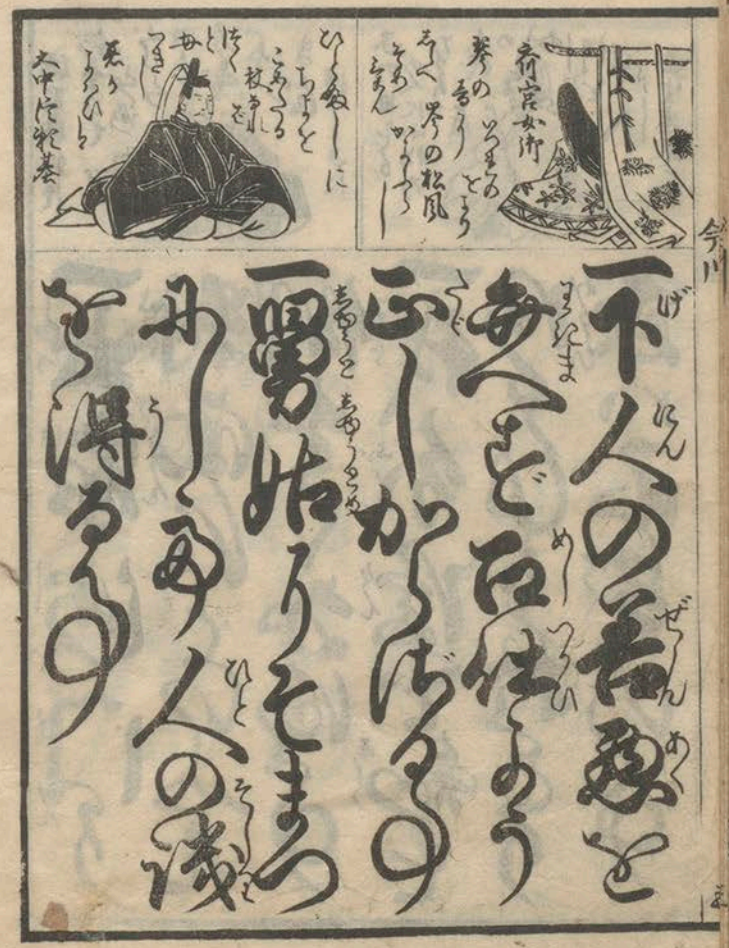
一組亀にて嬉しがる
のひ娘うく人乃
躰と恥じる
一枚の猪利損ろ
さひ万事ふ付
人と遊ぶ



一人の中云と合て
人忠義とも用て
卵とたのむ
一夜者乃名もあれ
夫所をたくし
石仕乃者事


一生を終るまで法
のるを以て終
を定めとなる
一人に相をなるべ
わきまへ智あり
おりなり


一生家門
財産
例を
一我分
あい不足の



一下人の長恋を
あつまどに仕ふ
ひしかつたる
一男始りそまつ
み人の儀
を得る

一徒に頃りて
他人の噂を
ざるの
一男多くて
る迎を祝
ことを

一遍とまる人を嫌
ふ面白らふ
なと思ふ
一人来る時我ふ
嫌はせいうを
うぬ

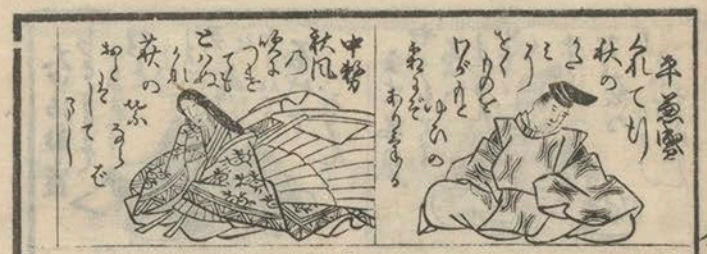
右ひ除と考ふ心に
きらるべきの孫
かつ沒ぐ子も成
沒しを恋ふ
ゆり先家と海の
面ここあいひご

すかとみて毎ゆ
我と為こだまの
ゆるぎもそも
天湯ふして強く
男のろこ地の張よ
してわるしかろこ

張る陽りこ
事も地月恋のろは
あふゆまみこら
と天地ふたこれど
まとまの如く敷い
るいもとれこらも

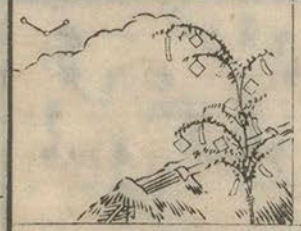
地のそこりこしだい
ともなきこころいそ
屋さくあるかう
交をかり和ゐを得
ろくしくなるよを
るべくしべゐ方ゐの

恋ゐ泡ひ人へ言葉
のなよるとゐ事
実ゐ実をふよ恋を
治る女はゐきの紙
ゐ者しゐ治る人の
言葉と知りゐべよ



八そ人の祝ひ事とうえて初るといつるわれだ
波よたぼうきうえ
家と礼すかるかな
しるを氣のあ事を
ぬひといを朔夕我と

七夕の奇



あまの川
いかに屋とこの
かくれ
ゆくえ
ろふ
わさ淑
ちるを
うみ

ひとつ見てわー
きとろ吾ようろ
すあと恋しみろの
理彼うをて生とり
せいぐもあるひ吾人
あるひ西人とか

七夕

仏の法は
夕ぐれ
きよらん

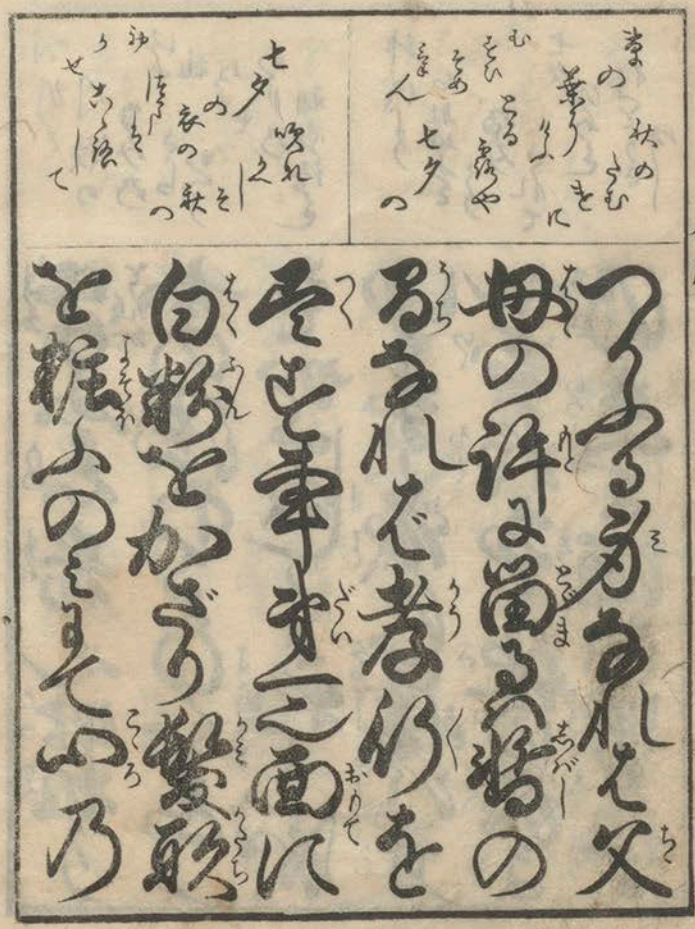
少しとなくなる
ちまきの
ひきうえを
七夕の
いそ

七夕事始をかきよりて男女ふ
ゐ男子出師と
とり方と傳道成
なりたるもひとり
いとをかしてい

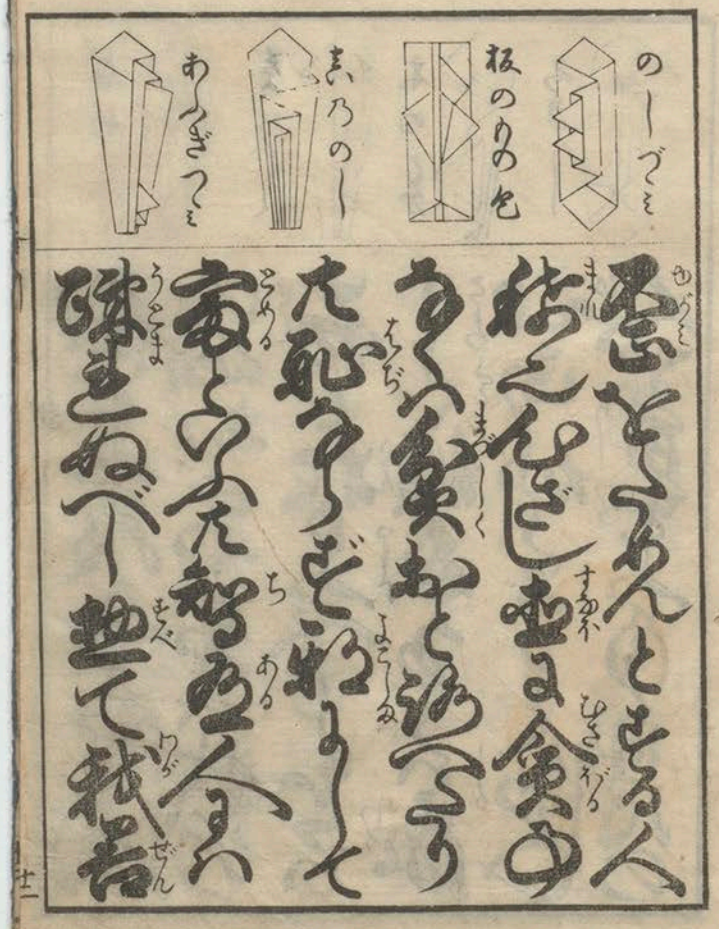
明りて
川瀬の
ゆみの
袖
わたり
あとの
羽ちがを

神代より
いれかわを
ゆみ
なして
七夕
ひめを
何とうき
ゆ

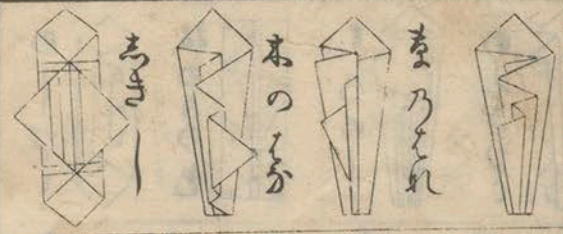
学の志希こ世知り
かの法わるの事
をかく色く彩り
ゆ事涙に落こ事
こ歳行ふ他の歌
ひ夫よ酒ひ男妙



つゝる分ゐれて文
物の洋よ留る物の
ゐれで孝行を
そと事ず二面に
白粉をかゞり製取
と紙ふのをすふ乃

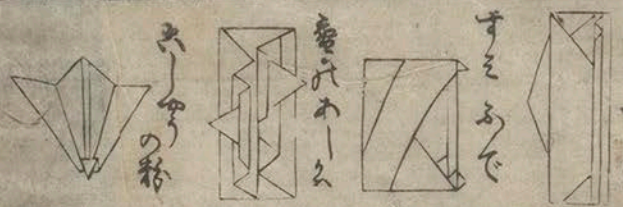


墨とゝんとをる人
物ゝんぢ世ま食の
ゝ笑ゐて洗ゝう
九郎ゝぢ物ゝて
家ゝの九郎乃人ゝ
味ゝねべ世て我吾



西と言ふんとこうて更
のふるごやうをべ秋の
若とおりつべーをへ
しく縦横のつゝ赤
ひ西かゝざると紙
人とをもつゝ月の

43871



筆耕　北尾門人　橋本德瓶

文化十一年甲戌六月吉辰

江戸下谷池之端仲町

書林　須原屋伊八板